
バカテス SS 「なんてこった、秀吉さんは男の娘おちんちんだったんだ」

metalika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカテス SS 「なんてこった、秀吉たんは男の娘おちんちんだっただ」

【Nコード】

N8343Q

【作者名】

metallika

【あらすじ】

バカテスの秀吉達の青春物

部屋は演劇関係の書物、映像、衣装、ぼろぼろの物語の本、そして乱雑に置かれてるアルコール、食料の買い置き
男物とも女物とも思えない服

これがこの物語の主人公、木下秀吉の部屋だ

彼は背が低く、華奢で可愛い顔つき、男とは思えぬ肉の付き方
まるで女のような外見をした男なのだ

さてその秀吉はというと、手元にショットグラスとぼろぼろの本を置き、眠っている

夜遅くまで酒を飲み、物語に浸り、そのまま寝てしまったのだろう

目覚し時計がなる

秀吉が時計を止め、ペットボトルの水を少し飲むと、鞆を掴み洗面所に行き、最低限の身嗜みを整える

まだ学校に遅れるような時間ではないが、秀吉は家をさっさと出ていこうとする

秀吉と服装以外は同じような外見をした女とすれ違う

「あらやだ、お酒臭い」

彼女は優子、秀吉の双子の姉だ

「大丈夫じゃ、Pクラスは酒臭い連中がわんさかとおるから、これぐらいでは・・・」

秀吉は投げやりに返事をする

「あんたのおかげで、私はアル中のチンピラ女と誤解されるのよ」

「すまないのう」

優子と秀吉は殆ど同じ顔なので、秀吉の放蕩ぶりが、優子の行為と誤解される事が多いのだ

優子が秀吉の胸に、拳をぶつける

秀吉は苦しそうに体勢を前かがみにする

優子は秀吉の髪を掴み、上体を戻す、そして拳を秀吉の胸に、何度も何度も叩きつける

秀吉は地面に崩れ落ちる

優子は時間を気にして、秀吉にこれ以上の追撃を加えず、この場を離れる

すぐには立ち上がれないと認識した秀吉は、這いずりながら玄関を出る

やや高めの酒から安酒まで散らばるリビングのソファで、まだあどけなさが残る、少年という言葉が似合う外見をしている少年と、背が高く精悍な男が寝ている

あどけなさが残る男の名は明久、彼の近くにはゲームのコントローラーと、やや高級な酒が置かれている

中学生の時に両親が海外に仕事に行ったきり戻ってこないのので現在はこの家を好き勝手に使っている

背の高い男は雄二、現在は明久の家の1室を間借りしている

彼の周りには粗末な安酒が置かれている

本来ならリビングは使用できない身分だが、彼等は元から友人同士であり

こうしてリビングで深夜まで酒を飲む事が多かった

携帯のアラームが鳴り、2人はもぞもぞと置き始める

雄二は洗面所に行き、髪型を整える

明久は特に準備もせず、2人は少々体を重たそうに家を出る

狭いアパートの一室に、多くのパソコン、映像機器、ポルノビデオ、

ブランデーやワインで埋め尽くされている

その狭い部屋のTVの近くに、ワインとグラスを手元に転がし、寝ている男がいる

この部屋の借主、土屋康太だ

彼は小柄で華奢な体をしていて、顔付きもまだあどけない

目覚し時計のアラームが鳴り、康太が眠そうに立ち上がる

昨夜、彼にとってはいつもの事なのだが、明け方までブランデーをちびりちびりとやりながら

ポルノビデオの干渉に耽っていたのだから、無理もない

彼は上記の3人と同じ学校に通う友人なのだが、彼はこのアパートの一室に一人暮らしをしていた

彼はその外見からは想像もできない性欲の持ち主で、幼少の頃から女体に興味を持ち

小学生の高学年には、盗撮、覗き、下着泥棒等の行為が常習化していた

親や教師、周囲の大人達が何度窘めても懲らしめても、彼の嗜みは矯正されず、

むしろ日々悪化していく有様であった

ついには中学生の時に、妹の入浴や着替えを盗撮し、家を追い出される事になった

さて彼は家を追い出される時に、しっかりとビデオカメラ等の撮影機器を持ち出していった

それからというもの、彼は盗撮映像等売り、ポルノビデオの海賊版を売り、生活費を稼ぐようになった

さて今康太はというと、果実をひよひよいと掴み、ろくに身嗜みも整えず家を出た

早朝の教室で、秀吉は物語に読みふけていた

教室はブルーシートの上にダンボールを机代わりにしたような環境

だ

ちらほらと教室に生徒が集まってくる

何故か男の割合が圧倒的に多い

この文月学園は、入学試験や進級テスト、成績、素行、能力、容姿、身分、寄付金等により、クラス分けがされる

このクラスはPクラス、1年のクラスでは一番総合的に評価の低い連中が集められたクラスだ

自然と問題事ばかりを起こす男ばかりの教室になってしまった

康太がコンビニで100円程度で売られる1Lのパック型のジュースをストローで飲みながら登校してくる

「秀吉、その本エロい？エロい？」

康太は秀吉の傍により、話し掛ける

「エロクはないのう」

教室は朝から一杯やつてる者、談笑してる者、自分の世界に浸る者、様々だ

Pクラスから離れた場所が、喧騒につつまれている

雄二が、他のクラスの者達と揉め事を起こしていた

自分達のクラスから離れた場所なのだ

明久が彼のよく回る頭脳と口で場を治めようとしている

周囲の者は少し落ち着き始めた

明久は幼少の頃は神童と呼ばれた程の男なのだ

次第に勉学から離れ、金儲けや遊びに没頭するようになったが、その頭脳は今でも神童と呼ばれていた頃の輝きを失ってはいなかった

雄二が、目の前の男を殴り、男を気絶させた

「何すんだテメエゴラ」「殺すぞオラ」「殺せ殺せ！」「腸引き摺ってやる！」

雄二や明久の周囲は騒ぎ立て、雄二や明久に襲い掛かってくる

「雄二、お前こんな場所で何を・・・」

「はっ、ムカツイタから殴っただけさ」

雄二はそう言いながら、襲い掛かる男達を掴み、投げ飛ばし、周囲の者の勢いを減らしていく

彼は幼少の頃から気が短く暴力的で、気にいらぬ者は全て殴ったり、突き刺したりしてきた

そのような性分なので、両親はいつも泣き、困り果てていた

そんな両親を見て申し訳なく思い、中学１年生の早々には実家を出ていた

それからという者、彼の心を縛る者は何もなくより一層その短期な性格に拍車をかけ、好き勝手に暴れる日々を送っている

明久は詠唱中の男の頭を木刀で叩きつける

男は、その場に崩れ落ちる

叩きつけられた男の名は松井、魔法を得意とする者で、かなり厄介な相手だ

明久は始めからこの男を認識していて、闘う事になれば真っ先に潰そうと始めから考えていたのだ

特に雄二の闘いぶりは凄まじく、背中に背負っていた槍を豪快に振り回し、武器で防御しようとするものがいても

その防御を強力な力で吹き飛ばし、叩き潰していく

「アウェイクン！」

そのような叫びと共に、2 M 7 0 c mはある大男が出てきた

その大男は召喚獣と呼ばれる物だ

呼び出せる召喚獣は、契約者の試験の成績、学校への寄付金、素行、身体能力、精神能力、等から総合的に評価される

点数により、呼び出せる召喚獣が決まり、その能力に付加価値を与える事もできる

「奴等は召喚獣の能力は低い落ちこぼれどもだ、召喚獣で勝負をつけるぞ！」

誰かがそう叫ぶ、周囲の者達もそれを得策だと思い

「アウェイクン！」「アウェイクン」

皆同じような叫びをし、人と同じような外見をしたものから、異形の形をしたものまで様々な召喚獣呼び出す

「ヒサ！」明久が叫び、180cm程の、明久と同じような外見の、しかし幾分遅い男が召喚される

ヒサと呼ばれた明久の召喚獣は、日本刀に魔法を付与した攻撃で、迫りかかる召喚獣に立ち向かう

「ユウ！」雄二も叫び、210cm程の、長ランを羽織った男を召喚する

ユウは5m程の長い槍を突き刺し、召喚獣の何体かを葬り去る

しかし、先程の男がいったように、やはり雄二達の召喚獣の能力はこの多勢の召喚獣を相手にするのは難しかった

「戻れヒサ！」「一旦体勢を立て直すぞ、ユウ」

明久と雄二は召喚獣を戻し、逃げ出す

「殺せー！」「焼却炉で灰にしてやれ！」

これは明久と雄二の、いや、この学校の日常的な光景であった

追撃を逃げ切った明久と雄二は、自分達のクラスに入る

追手も、迂闊にこの当なりに踏み込めば他のクラスと挟撃される可能性が高いと判断したのか

追ってくる様子はない

「お前等、また喧嘩したのか？」「おいおい、俺等はまだまだ生きたいんだぜ」

「明久、手が必要か？」「財布、剥ぎ取って一杯やる？」

秀吉と康太が明久達の傍に来る

「もう来そうにないよ」

皆つまらないといった顔をする

いずれ教師がやって来て、授業が始まった

秀吉は比較的まともに授業を受けている

康太は半分講義を聴きながら、自分の撮影したコレクションを眺めている

「うわっ、このC組の子パンツないなあ、俺パス」

明久が覗き込む

雄二は苛立っている

今朝の逃走を情けなく思ってたの事だ

「なあ秀吉、お前はこの子のパンツどう思う？」

「パスじゃ」

秀吉がさっと画面を見て、答える

「じゃあこの子は？」

「ありじゃ」

秀吉がめんどくさそうに、画面を見ずに答える

「康太ー、秀吉が冷たいよー」

「おいらの財布も寒いさね。秀吉、お前もだろ」

顔は教師の方に向いてるが、その顔は引きつっていた

「そっだ、4人で何かやるうか。雄二や秀吉は万年金欠だし、俺等もいくらでも金は欲しいし」

「雄二、聞いてる？」

「金金金つてよ、金もいいけど、まず先に今朝の礼をきっちり――」

「――」

「雄二、もうすぐ学費払う時期だけど、金あんの？」

雄二の苛立ちが不安に変わった

秀吉も学費という言葉聞いて、顔を明久達の方に向ける

「大変なのじゃ、学費をどうにかしないと不味いのじゃ」

収入源はたまに入っているバイトのシフトと、明久の仕事の手伝い
秀吉は家に入れる金と、食費と学費で日々困っていた

秀吉がリビングに足を踏み入れる事はなく、食事は出来合いを買う事が多いので、秀吉の食費は思いの他高くついていた

「もう辞めようかな、学校」

雄二がブルーシートに全身を委ねるように倒れ込んで言う

「お前、悪事が苦手なのに、学校辞めてどうすんの？」

明久の言う通り、雄二は悪事があまり好きではない

暴力事件は明久達4人の中でずば抜けて多いが、凡そ金絡みの問題はあまり起こさない

主に明久、時折康太から用心棒や揉め事の物理的解決、抗争等を引き受け、その金でなんとかやっていつてるのであった

「俺、もっと広い部屋に引っ越したいんだよね、今のアパート物でいっぱいだし」

「俺は車欲しいんだよね、車」

こんな話をする時の4人は、どこか楽しげだ

今日本では学費や医療等、福祉は税金では賄われていない
全額自己負担になっており、政府は一切関与していない
高校、大学を卒業しているという事は、立派な1つのステータスなのだ

だから、学費はかなりの物になる

教育を受ける事を諦めてふて腐れる者もいるが、なんとかしようと
する子供達、若者達も多い

なんと美しい姿だろうか

これが本来の人間の、国の在り方である

私は世界中の多くの国が、このような国になる事を望む

「いつそ車盗むか？」「カーナビ取るだけでも結構な額になるんじゃないか？」

「秀吉、お前はやっぱり振り込め詐欺だろ」

「わしはやっぱりそれかのう」

秀吉は声を自由に変える事が出来た

その能力を使い、振り込め詐欺等で稼いでいた

なにより高校の入学金もそれで稼いだのだ

「いいよなあ、俺なんて小銭ちまちま稼ぐしかないんだから」

康太がぼやく、彼は生活費や学費に困ってる程ではなかったが、収入はどれもチマチマとしたものばかりなのだ

「慰めてよ秀吉」

康太が秀吉に抱きつく

「コラ、引っ付くでない」

秀吉はいつもこういう役回りなのだ

しかし、秀吉は皆に助けてもらって、なんとか学校に通っているという感じが強い

彼はこのような役回りも半ば仕方ないと思っていた――ある程度ならば

「胸に顔を近づけるのではない、変体が主は」

「ああ、俺は変体さ！妹の着替えを盗撮したんだからな！」

康太はビスコタをゴクゴクと飲み、ブルーシートに顔を埋める

「うえっ、よくあんな甘いもん原液で飲めるな」

「今でも十分変体だけだな、男の胸に顔を埋めようとしてるし」

明久が責立てる

「秀吉可愛いじゃないか、男のくせにこんなに可愛いなら、女よりもいいじゃないか。」

女なんて、体以外はクソだ！！」

康太は居直っている

「そう、俺も同じく変体！」

今度は明久が秀吉の胸に顔を埋めようとする

「やめんか、変体ども」

秀吉が必死に抵抗する

「へへへ、変体ー」

康太は明久の慰めが効いたのか、元気を取り戻し、再び秀吉の胸に顔を埋めようとする

「ここは変体が多いわね」

ポニーテールの女が呆れたように言う

彼女の名は島田美波、この教室での数少ない女子である

「目の前で気持ち悪いことすんな」

雄二が2人の頭を掴み、壁に投げつける

飛ばされながら、2人は声もなく会話していた

（変体っていいよな）

（ああ、欲望に正直になって変体と言われるなら、それでいいじゃないか）

2人は壁にぶつかって、崩れ落ちる

「いつもありがとうなのじゃ、雄二。雄二にはいつも止めてもらってるのう」

雄二は少し照れ、男相手にそんな表情をする自分を情けなく思う

「目の前であんな気持ち悪いことされたらな」

武器や召喚獣を携えた男達が、ドアを蹴り破り、Pクラスに乱入してくる

「今朝の礼に来たぜ！」「お前等全員皆殺しだ！」

「なんだあてめえコラ！」「人のクラスに入って、生きて帰れると思ってるのか？」

皆、朝の話は聞いていたため、いやもつとも、このような事はこの

学校で日常的な行為なので

即座に立ち上がり、戦闘態勢に入る

先程すぐに攻めてこなかったのは、授業前なら他のクラスにも挟撃されてしまう事を案じての事だった

授業中の今なら、すぐには他のクラスが立ち上がらないと踏んで、授業中に攻め込んできたのだ

男達が一斉に襲い掛かる

明久や康太も頭をふらつかせながら立ち上がり、皆召喚獣を召喚したりして迎え撃とうとする

が、召喚獣の能力ではどうにも劣るのだ

こうして召喚獣を召喚された状態でまともに闘えば、Pクラスは苦しい

「女は殺すなよ、ここの女子はどれも粒揃いだ」「女は俺が貰ったあ」「ずるいぞ、あの子は俺が」

美波が男達に狙われる

彼女は両手剣で、召喚獣はレイピアで迎撃する

幸い、Pクラスは1階である

もうすでにガラスなど割られてない窓から、皆次々と逃げていく皆ここは一旦引き、Pクラスの強み、喧嘩慣れを生かしての奇襲戦法で報復しようと考えての事だ

「秀吉」

明久がそう言うと、秀吉は美波の手を掴んで逃げ出す

それを確認すると、自分達も窓から逃げ出す

明久達は特に重点的に狙われていた

「明久、わしの足では追いつかれる」

秀吉は美波と先に逃げていたのだが、美波を明久に引渡す

秀吉と雄二が逃げ切れないと悟ったか、足の速い追手を迎撃する

門の前はどこも乱戦状態だ、門はどこも閉まっており、この状況で乗り越えて逃げるのは得策ではない

松井が、明久を狙って多数の魔法を放ってくる

「今朝の礼だ、お前には死んでもらうぞ」

明久は美波と一緒に逃げ出す

そのような攻防をしていると、いずれ人気の少ない所にたどり着く

松井の放った魔法が、美波の足に当たる

「つつ」

美波は足を負傷し、走れそうにない

「逃げる、美波」

明久はそう言いながら木刀を構え、松井に突っ込んで行く

今ここで松井に勝つか、美波が逃げる時間を稼ぐしかないのである

明久は松井が召喚した召喚獣にぶつかる

3mは越す、鉄の鎧を着込み大剣を持つ大男だ

明久もヒサを召喚する

ヒサは魔法を日本刀に付与し、大男の後ろに横に動き回り、何度か当てている

しかし、大男には然程効いてるようには思えない

明久が召喚者本体を潰そうと、松井の元にもう一度走り出す
が、その間に松井は魔法の詠唱をすでに終えていた

飛び掛ってきた明久に、松井の威力の高い魔法が放たれる
「グアアツ」

明久は吹き飛ばされ、何かの魔法が書かれた石に直撃する

松井が明久の元に近づいてくる

「お前、あの女が大事みたいだな」

明久が焦りの表情を見せる

「好きな女を逃がすために、適わぬ相手に自分の命を捧げ――か。かつこいいなあ。」

そんなかつこいい真似お前にさせたくないね。

お前はそのまま生かしてやることにするよ。」

明久は動かない体で、立ち上がろうとする

明久に、何者かの声が語りかける

「力が欲しいか？」

立ち上がろうとしたが、やはり崩れ落ちる明久

「欲しい」

「いずれ命を捨てることになっても？」

明久はなおも立ち上がろうとする

「欲しい、命を捨てることになっても、今、今――」

「いいだろう」

松井は明久を捨て置き、美波の逃げた方を追おうとする

血が美波の行く先を証明している

明久の体に竜のような鱗が出来、竜のような羽が生えている

明久は羽を羽ばたかせ、松井の方に突進する

背後からの奇襲に気づいた松井は、すんでの所で明久の攻撃を避ける

明久はそのまま勢いに任せて、前方に進んでしまう

明久はこの、変身したばかりの力を使いこなせてはいない

（なんだ、召喚獣――じゃない？魔法でもこんな高度な魔法は俺でも――）

松井は動転しているが、すぐに結局は倒してしまえばいいと、詠唱を始める

幸い明久は松井より遙か前方におり、松井の得意の高威力魔法で狙い撃ちしてしまえばよいのだから

明久は慣れない翼を使う事を一旦諦め、なんとか松井の下に近づこ

うと走り出す

明久の身体能力は遥かに上昇していた

松井は焦らずに、確実に高威力の呪文を詠唱し、放つ

明久は魔法を防御しようとする

が、高威力の魔法を抑えきれず、明久はまたも吹き飛ばされる

そのような攻防を何度かするうち、明久は松井の下に近づいていた

「放て、私の最大の攻撃は、火だ」

明久はそれだけの言葉で理解したようだ

体の全身から、熱い物が口に集まっているのが理解できる

松井も魔法の詠唱が終わろうとしていた

それに加えて、明久の側面には、松井の召喚獣が大剣を振り下ろそうとしている

「この距離で当たれば、俺の勝ちだ!!」

松井は近距離の明久に魔法を放つ

明久の口から大量の炎が吐き出される

炎は松井の魔法を消し去り、松井の召喚獣を炎に包む

松井はこの時察した、この状況で、逃げる事も次の魔法を放つ事も、召喚獣に頼ることもできないと――

明久は松井の顎に拳を放つ

それは大柄でもない明久の体から繰り出される力とは思えない程の威力であった

松井はその場に崩れ落ちる

召喚獣は召喚者の意識が消え、その姿を一時的に消した

明久はそれを確認すると、その場に崩れ落ちた

Pクラスの面々は逃げては奇襲、隠れては奇襲といった戦いを続けていた

が、雄二は門の前で闘いつづけていた

「逃げる、雄二！」「真正面から闘っても勝ち目はないぞ」

雄二は、槍を奮い多くの男達と渡り合っている

門を正面突破して一旦学校から逃げるのが目的なのか――が、最早そんな当初の目的などどうでもよかったのかもしれない

雄二は槍を振るい続ける

2mは越す召喚獣達が、雄二の攻撃を抑える

いくら雄二がいじょうぶで個人の戦闘能力に優れていたとしても、複数の召喚獣相手に適うわけがなかった

雄二に気を取られていた男達の後方で、大きな爆発が起こる

康太が召喚獣と共に、門を爆破したのだ

Pクラスの面々は、皆門を抜けようとする

が、雄二はその騒ぎに気を取られた敵の心臓目掛けて槍を突き刺す

槍を引き抜き、男から大量の血が吹き出る

皆が反応をする前に、もう1人の心臓を槍で突き刺す

また抜く、当たりは血で染められる

康太が雄二の頭部を鈍器で強打する

意識を失った雄二を、康太が連れ去り、門から逃げる

「恵次、恵次。今病院に連れて行ってやるから、死ぬんじゃないぞ」

先程雄二に心臓を突き刺された男、恵次を、恵次の友人、友哉が、

恵次を背負い、門を出て行く

「俺もう駄目かしねえ」

恵次は、もうすでに覚悟を決めていた

「馬鹿、今の医療を舐めるな！これぐらいいなかなる」

「俺、そんな治療受ける金なんてないよ、もういいんだ」

「俺の金も出してやる」

「いいさ、そこまでしなくて。俺は次男坊なんだ、引き継ぐべき者も何もない」

「生きてもらうぞ、生きて俺にぶん殴らせろ、そうしないと俺の気がすまない」

は怒りながら、走る

恵次は生きる気力もすでになくしており、物思いに耽る

「光子もよお、恵一兄様の所に行ってしまったし」

「あんなブスのくせに自惚れだけは立派な奴、ほっとけよ。生きてもつといい女を物にしようぜ。」

それか恵一をぶつ殺して、光子を奪い取ればいい」

「恵一兄様が死んだら、父様や母様が悲しむ、光子も悲しむ」

「いいじゃねえか、別に」

「よくないよ」

「そうか、じゃあ世界中の美女を物にしようぜ」

「世界中の美女か、悪くないな」

恵次の表情が少し明るくなる

友哉の目前に、病院が見えた

友哉はそのまま病院に駆け込む

「心臓を槍で突き刺されたんだ、なんとかしてくれ」

友哉がナースに急いで言う

「今、幾らお持ちですか？」

ナースが、優しく問い掛ける

友哉が、恵次の財布と自分の財布からたたき出すように金を出す

ナースは、まるでこの世の者とは思えぬ優しさの持ち主で、散らばった金を財布に戻してやり、友人のポケットに入れてやる

「お友達、助かるといういわね」

交渉なんてしても無意味だと察した友人は、恵次を担いだまま病院を後にする

「もういいんだ、友哉、最後に、光子に会いたい」

「解った、じゃあ、お前は、絶対諦めるな、光子に会っぞ」

「ああ、諦めない。必ず、生きて光子に会う」

友哉は恵次を背中に背負ったまま、また走り出す

友哉達は電車に乗り、故郷へ戻ろうとしていた

途中何度か、恵次は意識を失いそうになったが、なんとかまだ生きていた

「俺、光子にあつてどうするんだろっな」

「愛の言葉でも捧げればいいさ」

「届きやしないよ。でも、光子に会いたい」

「ああ、俺も久しぶりに故郷に戻ってみるのも悪くない」

「2人で地元を飛び出して、一度も戻ってなかったからな」

「皆元気にしてるかな」

「お前、両親に会えよ」

「まだ何にも渡す金も掴んでないんだぞ、会えるかよ」

「でも、お前長男だろ」

「長男だからってなんなんだよ」

友哉は拳を椅子にぶつける

本当は、恵次にぶつけたかった拳だ

だが、その願いはもうかなえられない

いずれ2人は電車を降りた

駅を降りると、友哉と恵次の友達達が、2人を出迎えた

友哉が1人の自転車を借りて、自転車を漕ぎ出す

恵次を、1人の友人が自転車の後ろに乗せて走り出す

いずれ一軒の民家に着く

チャイムを鳴らし、1人の若い女が出てくる、光子だ

「恵次？」

光子は、重傷の恵次を見て驚く

しかし、すぐに理性が働き、落ち着いた様子で言う

「何の用？悪いけど、私は今は恵一と・・・」

「愛してる」

「そう、でもさっきも言った通り、私は今は恵一さんと付き合ってるから」

「ハハハハハハ」

恵次は手の平で目を覆い、盛大に笑う

すぐに地面に崩れ落ちた

友哉と友人は、顔を下に向ける

暫くすると、恵次の体を自転車に乗せ、友哉達はその場を去った

友哉は、恵次を担ぎ、恵次の実家に行った

恵次の両親が出てくる

「恵次君、墓に入れてもらえませんかね」

「家を飛び出して行った次男坊ですから、墓に入れるわけにはいかないわ」

恵次の母が悲しそうに答える

恵次の父が、扉をがちゃりと閉める

彼は、この家の世帯主として、扉を閉めなければいけなかったのだ

彼個人の感情は置き去りにして

恵次の葬儀は、最低限の事が、地元の友人達と行われた

葬儀の途中、恵次の母は一瞬近くまできていた
もつとも、すぐに夫に連れられ、戻っていったのだが

恵次の遺骨をどうするか、友哉や友人達は話し合い、思案にくれた
最終的に、恵次が遺骨を引き取ることになった

恵次はそれから実家に戻り、暫く家業の手伝いや畑仕事をし、夜中
や合間の時間で、外の仕事をして
少しだけ金を蓄えていた

何も金を持たずに帰り、恵次は情けなさに負け、何度もまた家を飛
び出そうとしたが、今は耐えた

その間、このような会話を恵次と両親の間であった

「やはり、お前は長男だからね。そこらの次男坊と同じ様に、家を
飛び出てはいけない」

「ずっとここに入ればいい、今回の事も、いい経験だったろう」

「でも僕は、やはり申し訳ないという気分がいつぱいです」

「最近、ちょこちょこと外でも仕事をしているみたいだね」

「はい、この家で何不自由ない生活をさせてもらってるんですが、

――

「恵次君の墓か？」

友哉は凶星だという表情を隠せない

「私も恵次君の事を知らないわけじゃない、どうだろうか、お前が
家業を継ぎ、ここで一生を終えるというのなら

彼を家の墓に入れてやってもいい」

友哉の父は、近頃自分の過去を振り返ることが多かった

彼もまた、若い頃長男の責を放り捨て、街に飛出して行ったことがあった

友哉は首を縦には振らない

「お前等だつて今まで多くの者を傷つけてきたんだろ。正当な報復なんてお前等にはあてはまらん」

友哉の考えを全て見ているかのように、友哉の父が言う

「すいません、俺にはやらなければいけない二つの事があるんです」

「1つは、供養。1つは報復か」

友哉の父は、湯のみを友哉に投げつける。そして、灰皿で何度も叩きつけた

彼は息が切れると、その場を去った

その後も友哉は変わらない生活が続け、ある日小さな墓を立てた

それから、友哉は再び故郷を出た

「俺とじゃ釣り合わないよ」

「雄二じゃなきゃ嫌なの」

雄二と、背が高く容姿端麗な女が話している

女の名は霧島翔子と言う

雄二が翔子の手を引っ張り、彼女のクラスへ送り返そうとする

「Aクラスの人間がこんなとこ1人で歩いてたら、狙われるぞ」

「大丈夫、付きの人達もいるから」

翔子から少し離れた位置に、ちらほらとPクラス近辺の人間ではない者がいる

「とにかく、もうこっちは来るなよ」

その後、雄二はAクラスの前で翔子と分かれると、自分の教室に向けて歩き出す

人気の少ない所を歩いていると、不意に、自分の体に衝撃が走る

背中から、槍で心臓を突き刺されていた

刺した男は、言うまでもないが友哉だ

槍を引き抜き、少しの間合いを取り、今度は雄二の首を思い切り突き刺す

雄二は死を覚悟していた

「翔・・・子」

「何か言い残したいことがあるのか？」

友哉が雄二の両足のアキレス腱を切り裂きながら、言う

「愛してる。霧島翔子にそう伝えてくれ」

雄二が本当に翔子を愛していたのかは解らない

また、この場では「俺のことは忘れて幸せに」等の方が、格好はつくだろう

股の緩い現実の女からも、賞賛を浴びせられるかもしれない

だが、彼は怖かった

誰からも愛されずに死ぬと言う事が

「ああ解った、必ず伝える」

友哉はそう言い、再び雄二の心臓を槍で突き刺す

雄二が倒れる

友哉は雄二をあお向けにし、雄二の体を捌き、心臓を取り出し、踏み潰す

とうに雄二の体は動いてなかった

他にも体の臓器を全て取り出し、踏み潰す

ようやく雄二の死を確認したのか、友哉はその場を去る

彼はそのまま翔子の元を訪れ、彼の最後の台詞を伝える
翔子はすっとその場に、倒れ込むかのように座りこみ、涙だけを
流した

友哉は早々にその場を立ち去った

雄二の慎ましやかな葬儀が開かれる
参加しているのは翔子、明久、康太、秀吉、他に雄二の友人やクラ
スメイト達といった所だ

費用は主に翔子と明久、それと康太と秀吉も小額ながら負担してい
た

今、火葬が行われ、遺骨が翔子達の元に届けられた
明久はぼうつとしている

彼は雄二の死を、すぐに受け入れた
自分達はいつこうなる事も覚悟の上であつたからだ

康太は落ち込んでおり、秀吉は涙をこぼしている

翔子は雄二の遺骨に近寄つて言つた

「大丈夫だからね、ずっと一緒だから」

遺骨は翔子が引き取る事になった

その後、すぐにはいかなかったが、雄二の遺骨は翔子が買った墓
に入れられた

翔子は後の人生も、雄二以外の男とは関わりなく過ごした

そして、死後には雄二と同じ墓に入った

「女は全員犯して、金は全て奪えー」「今日はパーティーだー！」「
ひゃっほー」

Pクラスの面々は襲撃を受けていた

雄二の亡き今、戦力は大幅に減少していたため、格好のカモであつ
たのである

皆、逃げ様にも今まで最前線で場を抑えていた雄二がいないのである

逃げることもままならなかった

「皆、今はなんとか逃げるんだ。うあああつ」

即座に、明久が竜の力を解放する

以前よりも、より竜の姿に近くなっている

炎を、男達に吐きかける

その炎にまぎれて、1人の首を噛み千切る

男の首が、ごとりと地面に落ちる

「てめえつ」「殺してしまえ」

男達と、その召喚獣達が明久に襲い掛かる

竜の力を解放した明久に、人間程度の攻撃はさして脅威でもなかったが、召喚獣の攻撃には流石の明久も怯む

明久は怒りに任せて叫び、体は最早人間の原型を留めていなかった

炎を吐き出し、男達は炎に包まれる

炎に包まれ動揺している男達の首元を、一人一人噛み千切っていく

首はごとりとごとりと落ちていき、教室には生首と、首から上を無く

した体が転げ落ちていく

「皆、今だ、やるぞ」「明久に続け」

Pクラスの面々が一斉に攻撃に移る

いずれ、男達は逃げ出した

明久が1人、追い駆ける

逃げ惑う男達の前に立ちふさがり、1人1人、首を噛み千切っていく

「なあ、宏美君、こいつらちゃんと掃除するのかな」
「知りません」

少し離れた位置で、教師がぼやく

明久の攻撃を掻い潜り、逃げていくものもいる

秀吉が明久の姿に変身し、男達の前を塞ぐ

「もうこっちにきたのか」「うわああ」「おいお前等、こいつは木下の変装だ」

秀吉の仕業だと気づいたものもいるが、多くは別の道に逃げ出した

Pクラスの面々が、男達にガソリンやオイルを浴びせ、即座に逃げる

追いついてきた明久が、男達に炎を吐く

皆、ガソリンやオイルが手伝い面白いように燃え上がる

「うわあつあああつ」「助けてくれええー、俺等の負けだ、有り金出すから」「熱いよおお、怖いよお、おかあちゃんっ」

「ハハハハハハ！」「やつべwwww」「みつともねえー」

Pクラスの面々が笑う

秀吉も腹を抱え、地面に転がりながら笑う

「おかあちゃんっ、おかあちゃんっ、助けてよお」

秀吉は炎に悶えながら泣き叫ぶ男達の、とびきり情けない台詞を真似する

ちゃんと仕草まで真似てる所からも、秀吉の演じるという事が好きなのが伺える

皆それを見ていつそう笑い出す

先程の教師と宏美と呼ばれる生徒が、この現状を見て話している

「宏美君、この校舎いつまで持つと思う？」

「私はコートや体育館、グラウンド等が大丈夫なら別に、教室はどっとなってもあまり関係ありませんね」

「俺は困るよお、冬場、屋根も壁もない所で授業しろっての？」

「青空教室つてのも悪くないかもね、開放的で」

「ああ、まあそれなら禁煙もクソもないしな」

「煙草なんてやめた方がいいですよ、先生。先生も何かスポーツですつきりしたら――」

「宏美君は元気だなあ」

炎に包まれた男達は、いずれ動かなくなっていく

明久がまだ生きている男達の首を噛み千切っていく

いずれ炎が収まり、男達の焼け焦げた体が残った

「財布も焼け焦げて、金にならないじゃん」

康太が不機嫌そうに言う

「ハハハハハハ」今日は、勝利の宴ともいえないかな」

Pクラスの皆は笑う

「まあ、そんな細かい事気にするな」

明久が康太の背中を力強く叩きながら言う

「金金と煩い明久らしくない台詞じゃのう」

「まるで誰かみたいだな」

明久はどこことなく、欠けた雄二の分を、自分が補わなければいけない気がしたのだ

明久はポケットから無造作に掴んだ金を、Pクラスの1人に渡す

「それで酒ぐらい買えるだろう、今日は勝利の宴だ」

「飲むか」「俺は酒、もってくるわ」「俺もなんか摘める物があつたな」

皆宴の準備をし、教室は賑わいだ

皆ここの所落ち込んでいたので、こんな楽しい気分は久しぶりだった

た

「よつ社長」「どうぞ、一杯」

明久は元々力を誇示するのが好きなのだ、宴の主役になり、上機嫌だった

女子の制服、セーラー服、ブルマ、ビキニ、ワンピース、色んな女物の服装が、秀吉に突き出される

「さあ、さあ、どれがいい？」

「ブルマやビキニはないじゃろう、流石に。強調されてしまうぞ」

秀吉は視線を泳がす、ふと、誰かに助けを求めようとした……が、すぐに視線を戻し、言った

「よし、じゃあ着てやろうかのう」

「秀吉ー」「待ってましたあ」

何人かの護衛を連れて、秀吉がトイレに行き、着替えを済ませてくる

「ビ、ビキニ？」「これじゃあ秀吉さんの大事な所が、くつきりと

……」

皆が秀吉の股間に視線を集める

「どうじゃ、これで夢も覚めたであらう、わしにもちゃんと立派な
いっ」

「なんてこった、秀吉さんは男の娘おちんちんだっただ」

「それもそうだ、秀吉さんのおちんちんがそんなにでかいわけがない」

「全然目立たないぞ、いや、小さな膨らみがなんとまあ素晴らしい」
教室は一層騒然とする

「お、御主らどこまで変態なのじゃ」

「秀吉ー」

明久が秀吉に飛び掛る

「顔を股間に近づけるではない」

秀吉が明久の頭を押さえ、抵抗する

「秀吉たんのおちんちん、こんなに小さかったんだね、これならもう僕達の間におちんちんなんて障害は……」

美波が明久を蹴り飛ばす

「気持ち悪いのよつ、あんた」

皆、酔いも手伝い笑いだす

教室の前で煙草を吹かしていた教師が、授業中の宏美を呼び出す

「ちよつと、宏美君、宏美君」

「俺なんでここにいるんだっけ」

「Pクラスの授業に来たんじゃないですか」

「いやでも、もう放課後じゃない？なんか皆出来上がってるし」

「まだ授業中です」

「そうか、じゃあ授業しないとな」

「そうですよ」

教師が、Pクラスに入る

「お前等ー、授業始めるぞー」

「あ、先生。先生も一杯どうですか」

亮が、グラスに注がれたハイボールを差し出す

「ん・・・これから授業だからな。これ飲んだら授業始めるぞ」

教師は、ぐいと飲み干し、強引に授業を始めたが、皆酔っていて、それどころではない

教師は面倒くさげに、煙草を出す

「ここ、禁煙？」

「ここは自由喫煙ですよ、先生」

「そうか、悪くないな」

教師はのんびり煙草を吸い出す

チャイムが鳴り、教師はだるそうに教室を出て行く

こんな感じで、明久達の毎日は繰り返される

その後、明久の能力の話は広がり、Pクラスが襲撃を受ける事は減った

皆思い思いの日々を過ごした

秀吉は演劇や物語の世界に没頭し

明久は相変わらず金儲けに精を出し

康太は盗撮やその映像販売をして

いずれ紹介することもあるかもしれないが、Pクラスの面々も

学業努力に励み、次のクラス替えて上のクラスに行こうとする者

強い野生のモンスターや神話の英雄を倒し、召喚獣にしてみまおうという者

料理に励む者、創作活動に没頭する者、音楽に情熱をかける者、スポーツに情熱をかける者

思想に明け暮れる者、信仰深い者、怠け、日々酒に溺れる者、女遊びに明け暮れる者、

皆、色んな人間がいる

だからこの世は楽しい

明久達が殺してきた男達も、皆、色んな奴等がいた

出会い方や環境一つ違えば、一緒に笑いあってる仲だったかもしれない

だが、それでいいのだ

友哉は離れた土地で、家業と同じような仕事をしていた

幸い、技術は相応にあつたので、生活費程度は稼げていた
しかし、供に夢を追った友人達とも離れ、失い、今は仕事が終われば安酒を飲む毎日

うまいとも何も思えない、ただ眠りへの誘いでしかない
彼にとつては何も楽しくなかった

（女でも見つけるかな）

ふと、見慣れた男の姿が目に入る

「けい・・・じ？お前、なんでここに？そうだよな、まだ全然死ぬわけにはいかないもんな。」

またでつかい金掴むために、ひと暴れするか。」

友哉は嬉しそうに、少し前の表情を取り戻し言う

恵次が出した短剣が、友哉の心臓を突き刺す

心臓から短剣を突き刺し、今度は首を突き刺す

恵次の姿が、秀吉の姿に変わる

「何か、言い残したい事はあるか？」

「へへっ、何にもねえや」

「可哀想じゃのう、残す言葉もないとは」

「ただ、でかい物だけを追ってきたからな。辞世の句なん」

友哉は倒れた

秀吉は友哉の死を確認すると、友哉の携帯を探る

友哉の実家の番号が入ってあつたので、実家に連絡して、友哉がこの場所で死んだことを伝え、この場を去った

男の命とは、美しく、儚い

優子は幼少の頃の記憶に頭を支配されていた

優子の隣には従兄弟の良一がともに歩いていた

1人の男が、患者に銃を向けた

良一は即座に反応し、患者を身をていして庇った

優子は、何もできず立ち尽くしていた

男はすぐに取り押さえられ、首をはねられた

事が終わると、優子は父に顔面を殴打されていた

上にのしかかられ、延々と殴られていた

秀吉の祖父、秀文が死んだ

遺書には、息子の秀継に家督を継がせ、秀継の死後は、秀吉に家督を継がせるようにとのことだった

即座に親戚や親しい者達が集まり、葬儀が行われた

皆が秀吉に対して恭しい態度を取る

優子は、今にも秀吉の首を絞め殺すのではないかというほど怒っていた

聞いた話によると、秀吉の誕生は祖父もおおいに喜び、秀吉という名前は秀文がつけたようだ

優子が物心ついた頃から、秀吉は秀文に気に入られていた

秀吉は子供の頃から物語や音楽、芸術活動に興味を示し、芸術家としての感性はとても優れていた

秀文は、病院の後継ぎ息子という立場にありながら、若い頃から演劇や音楽などの芸術活動にうつつを抜かしていた

自分と秀吉を重ね合わせていたのだろう

が、秀吉はあまり学問には優れていなかった

そこに眼をつけ、優子は只管学業に打ち込んだ

いずれは一流の医大に受かるために、秀吉に勝つために

優子もやりたい事はあった、だがそれを押し殺して学問に励んだ

それが今、家督はいずれ秀吉が継ぐ事になったのである

優子は頭を回らした結果、幾つかの案を出した

秀吉を亡き者にする 秀吉の評判をトコトンまで落とす

その後暫く、優子は屈辱の日々を絶えた

秀吉がリビングで食事をするようになった

秀吉がおちよこで、日本酒を冷で飲んでいる

「うまいのじゃ」

毎日毎日、リビングで両親が買ってきた酒で晩酌する秀吉が、優子にとって不愉快なのはいうまでもない

（なんでこんなアル中野郎が）

ずっと耐え忍んできた優子に、チャンスが訪れた

秀吉達のクラスが、優子の属するAクラスを狙っているとの事だ

（この機会に殺すか、それとも）

優子のクラスに、秀吉達がまともに戦っても、勝ち目はないのである

（奴等は、何か策を練ってくるはず。卑劣な策を）

優子は学校の帰り、書店のＢＬコーナーに寄る

筋肉質な男達と筋肉質な男達が抱き合ってる表紙でいっぱいだ

普段は遠巻きに見ているだけの場所であった

なんでもよかったのだが、せっかくだからと、テレビでちらほら見

た事があるキャラクターの表紙を何冊かレジに持っていく

学校にて

優子は付きの者を何人かつけ、秀吉達のPクラスを訪れ、秀吉達を罵倒する

「あんたなんて、まともに戦って私に勝てるわけないのよ」

「なんだてめえこら、殺すぞ」「秀吉たんのマイナーコンパチが、犯すぞコラ」

「やってみろやカスども、真正面からやって勝てると思ってんのか」

「お前等はコソコソしないとまともに喧嘩できないんだろうがつ。粋がつてると今死ぬぞ。」

優子達のうち、何人かは召喚獣を召喚したままだ

どれも秀吉達には召喚できない高レベルの召喚獣ばかりだ、威嚇には十分だった

「あんたって、本当どうしようもないクズね。私に勝ってみなさいよ。あんた達の得意な安い策を使って」

「うう。。。姉上達に勝てる方法？」

「私と同じ顔して、情けない」

「そういや殆ど同じ顔だな」

実家にて

リビングで、優子が母に対して声を荒げている

「部屋に勝ってに入らないでよ！」

「貴方、今までそんなの気にしなかったじゃない」

「今は気にするのよ」

廊下を歩いていた秀吉にもその声は届く

(???姉上の部屋に何か見られたくないもの?)

優子は荒々しい態度で、風呂に入る

その物音は部屋にいた秀吉にも聞こえていた
気になった秀吉は、優子の部屋を覗いてみる

机の上には筋肉質な男達がくんずほぐれつな本が置かれている

（おお、これは）

秀吉は顔を赤らめ、ぴらぴらとめくる

「同じ男とは思えんのう。わしの体とは全然違うのじゃ」

秀吉は自分の逸物と、本の雄々しい逸物とを見比べる

「う、、、なぜこつも違うのじゃ？」

秀吉はふと考え、机の上の本を持っていた

秀吉はその日、一晩中悩んでいた

（うつ、だめなのじゃだめなのじゃ。同じ屋根で生活している者に、
そのようなやり方は）

明け方、少し決心がついたのか、秀吉は早々と家を出る

教室にて

「明久、康太、頼みがあるんじやが」

「いいよ」

秀吉は反対されると思っていたので、その言葉に拍子抜けした

（あれ？まだなんもいってない）

「秀吉のおっぱいも、たくさん揉めば大きくなるよ」

「これなのじゃ」

秀吉は優子のB本を取り出す

「この本みたいな事がしたいんだね。僕から頼みたいような事だよ」

「姉上は気が短いのじゃ。この本で姉上を精神的に攻撃する」

「それはだめだよ、秀吉」

「頼むのじゃ、わしはわしでやる事がある。これは御主等に頼みたい」

「秀吉」

とあるクラス

「てめえ、一人で何調子こいてんだ」「それはAクラスを代表した台詞ととっていいんだな？」

「ええ、そうよ。あんたらみたいなクズがいると学校が汚くなるから、全員殺すっていつてるの」

秀吉が髪留めを外し、女子の制服で啖呵を切る

「上等だ！てめえら全員焼却炉で燃やしてやる」

とあるクラス

「おい皆、これが木下優子の趣味らしいぞ」

明久が優子のBL本を皆に見せふらしている

優子の噂が学校中に響き渡る

「優子、あいつ等全員殺しちゃっていいよこれ」

「あいつら、ぶっ殺してやる！」

「私、前から気になって、ちよつと買っちゃったの」

優子は泣きじやくりながら言う

「あんなの皆に見られて、もうお嫁にいけない」

「犯そうが殺そうが、好きにやっちゃまいな、お前等！」

「その木下優子の侮辱、きつちり受け取ったぜ」

「うおー！」

他のクラスの者達が、Aクラスに攻め込んでくる

Aクラスの者達も、少し遅れて迎撃する

「誰かが優子になりすまして、喧嘩を吹っかけてるみたいなのよ」

「好都合だな」

眼鏡をかけた男、久保が言う

「あいつら全員殺しちまえば、噂も広まらないだろう」

「久保君」

「そうだ、全員容赦なく殺しちまえ！」

初めこそAクラスは手間取っていたが、召喚獣が出揃うと、攻め込んできた者達は劣勢になっていた

久保の召喚獣が、二つの大鎌で次々と首をはねていく

翔子の召喚獣もまた、日本刀で多くの者の首をはねていく

辺りには、首と体が分離された体が転がっていく

その後、他のクラスもAクラスに攻め込んできたが、多くの者は転がっている頭を見て、戦意を喪失してしまう

Aクラスの面々はそれを逃さず、1人1人殺していく

愛子の召喚獣が、大斧で頭を叩き潰していく

脳みそがそこ等じゅうに散らばる

「ははは、ぐつちよぐちよー」

流石にAクラスの面々も疲れ果てていた

だが、もう多くの者は校舎から逃げてしまっていた

Aクラスの者達が何かに酔ったかのように、殺戮を行っている

中には、校舎に残っているだけの、始めから闘う意思を持ってないものまで殺してる者もいた

秀吉達

「どうしようかのう、まともに戦ってもこりゃ、全員殺されるのう」

「逃げちゃおうか？」

「え？いや事の発端はわしらじゃし、流石にそれは」

「かまやしないよ、他人の命なんて。敵が減ってすっきりするぐらいさ」

「大将、こりやもう逃げちまおうよ」「俺等死にたくないよ」
クラスの皆が明久に言う

「うん、もう逃げちゃおう！」

「さっすが大将、汚い人だ」

「逃げようかのう」

秀吉が笑って言う

Pクラスの面々は皆走って逃げた

遠巻きに教室を見ると、Pクラスの人間は全員無事であつたが、逃げ送れた者達の悲鳴が聞こえてくる

「ハハハハハ！」

走って息を切らした明久が地面に倒れこみ、顔に手を当てて笑う

「まあ全員無事でよかった」

康太が言う

「ハハハハ」「生きててよかった」「やっぱりまだ死にたくない」

「Aクラスなんてやっぱ無理だわ」「あいつ等ばけもんみたいに強いもん」

皆倒れこみ、笑う者、安堵の息をつく者、涙目の者

とりあえず、彼等はこれでいい

学校近くの喫茶店にて

「宏美君、明日行ってもあれ片付いてないよね」

「教師達も巻き込まれるの嫌で、逃げ出してますよね。先生とか」

「それより宏美君、かつてに禁煙席にするのはやめてくれないかな」

教師は煙草とライターで手持ちぶたさに遊んでいる

「私煙草の煙嫌いなんだもん。あ、このクレープおいしい」

教師はバーボンをちびりちびりとやっている

「明日授業休みかな」

「やるんじゃないですか」

「生徒の数どんどん減っていつてるんだけど」

「皆いなくなっても、私はまだいるじゃないですか」

「そうだなあ」

その夜、秀吉は明久の家に泊まる事にした

まあ、流石に今日家には帰れないだろう

秀吉達の周りには、高そうなワインや日本酒の瓶が転がっていた

「秀吉、もうここで暮らしちゃえば？」

「そうじゃのう、当分姉上とは顔合わせられんからの。それに、わしは御主の事が好きじゃ」

秀吉は珍しく、飲まれてるようだった。普段では中々言わない台詞だ。

「なんだ、それじゃ両思いだね」

「そうじゃのう」

後日、秀吉の家にて

秀吉は一旦家に戻っていた

リビングで、父と母と秀吉が座っている

「あの子はもう、お嫁には行けない身になりました」

「はいなのじゃ」

「お前が家督を継いだ場合、家や病院の書類も秘密も何もかも外に筒抜けにするということなんだな。秀吉」

「はいなのじゃ」

「お前は家族の名を使つて、そこら中に喧嘩をふっかけて来るといふ事だな、秀吉」

「はいなのじゃ」

「確かに、父上の言つた事は絶対だ。しかし、親戚も病院の医師達も、皆お前の事は信用できないと言っている。」

「はいなのじゃ」

「お前の事は今すぐ殺してやりたいが、父上の事がある。生活費や学費はくれてやる。」

芸術の道に進もうがどうしようが、好きにするといい」

秀吉は荷物をまとめ、家を出て行く前に言つた

「殴られると思つたのじゃ」

「お前、今の自分にそんな価値があると思つてるのか？」
「ないのう」

秀吉は笑つて家を出た

翔子宅

優子が大声で笑っている

「ハハハハつ、ハハ。ついについにやったよ。私勝つたんだ、あいつに」

このような事を家族に聞かれては、策が感づかれかねないので、広い翔子の家で勝利を囁締めていたのだ

明久宅

「そつか。」

「そつなのじゃ、まあ覚悟の上じゃ」

「これからどうする？」

「演劇に明け暮れてもいいし、美大や芸大に行つてもいいし、まあやりたいようにやろつかのう」

「秀吉らしいね」

「人の心配ばかりしおつて、明久はどうするのじゃ？」

「僕？僕は相変わらずさ、薬や女さばいて、三下子悪党を突き抜ける。もう少し売上増やすつもりだし」

「あんまり感心できんがのう」

「お嫁さんの分も、しっかり稼がないとね」

秀吉を見つめて言う。

「明久よ、前にも言ったが、わしもいずれ髭や体毛が濃くなるぞ」

「秀吉に髭なんて生えるわけじゃないか」

数年後

優子は医大を卒業し、父の病院に勤めていた

病院の次期院長として、着実に歩んでいた

ある日、親戚や従業員が集められた

その集まりの中心には父がいて、その隣には従兄弟の良一がいた

なぜ私がいるべき席に、良一がいるのか、優子は困惑し、頭が回っているような感覚に陥った

「良一を次期院長にする」

良一も医大を卒業し、同じ病院に勤めている

しかし、卒業した大学の偏差値は優子の方が上だ

それに良一は祖父秀文の次男だ、分家の子だ

私は本家の人間なのだ。それなのに、女と言うだけで良一に負けてしまったのか

例え邪魔な秀吉がいたとしても、自分は秀文の長男の娘だという誇りが優子にはあった

しかし、その誇りさえ今、崩れ去った

優子は呆然としたまま座っていた

最早、全てが馬鹿らしかった
全てを終わらせてしまおう

ある日、優子は病院に火をつけた
多くの人間が煙で倒れ、炎に囲まれてゆく

優子は、身動きのできない患者達を避難させようと足掻く父の姿を
見る

（いつも、忠義だなんだと言っていた父上らしい）

優子は、父の背後から心臓に剣を突き刺す

「かつはつつ、ゆう、子？早く患者を」

優子は剣で父の頭部を殴打する

「それから、逃げ出した医師や看護婦は全て殺せ。最後まで忠義を
尽くす者は、この病院が燃え尽きたとしても

面倒を見てやれ」

（本当に、父上らしい）

剣で父の喉下を刺す。

剣で頭部を再び殴打した。脳味噌が飛び散るまで殴打した。
父が死んだ事を確認すると、歩き出した。

良一も、患者を非難させようと懸命に足掻いていた。

（忠義かあ。だから選ばれたのかな）

良一の後ろから、剣で頭部を殴打する。

よろめいた良一に続けて、頭部を強打する。

良一が倒れこむと、腹を裂き、心臓、肺、腸、体中の臓器を全て取
り出し、踏み潰す

頭部を開き、脳味噌を掴んだ。

窓を開け、そこに助走をつけ、全力で脳味噌を投げた

（飛んだなあ）

優子は病院を後にした

優子は明久の家を訪れていた
家の中を捜すが、秀吉の姿はない
（あいつはやっぱりやつとかないと）

秀吉の行方の候補として、亡き祖父の実家を訪ねたが、秀吉の姿は
見えない
ついでに墓参りをしようと、墓に行った
墓石をどけ、祖父の遺骨を取り出し、足で踏み潰す
（骨を潰すだけじゃ、やっぱり満足できないな）

秀吉の行方を探していた優子だが、いつしか警察に追われていた

この世で2番目に重い、親殺しの罪を犯したので当然であろう

優子は人混みに逃げる

多くの者が警察の追跡に巻き込まれて死んでいった

いずれ避難が進み、優子の姿は警察から簡単に確認できるようにな
った

優子は路地裏に逃げると、すれ違い出て行く自分の姿が見えた
いや、優子より幾分脂肪が少ないように見える。秀吉であった。

秀吉は、銃撃に倒れる

秀吉は連れ去られ、人間ミンチにされた

教室

「お前等、ついてこい」

最早人間とは呼べない姿の明久が言う

「確かに、秀吉は大事な仲間だ」「でもよ、政府に喧嘩売って勝て

るわけないだろう」

「まだ死にたくねえよ」

明久は異を発する一人の者の首を噛み千切る

首がごとりと落ちる

いつも人なつこい笑顔を絶やさなかったクラスメイトだ

「俺に確実に殺されるか、勝てば生き残れる闘いか、どちらがいい」

首を噛み千切り、大剣で首をはね、心臓を突き刺し、従わない者達を殺していく

一緒にサッカーをして遊んで、麻雀をやって、酒を飲んで、皆と過ごした時間が、頭を支配する

（健児はサッカー上手かったな。一緒にサッカーやってて、本当に楽しかったよ）

（ギー太は本当にギターが好きだったな。よく皆の前で演奏してて、皆を楽しませて。）

小さな子供がいる者もいる、故郷に残してきた母に、楽をさせてやりたいと一攫千金を夢見る者もいる
色々な人間を明久は殺していく

「命をなんだと思ってるんだ！」

明久が涙を流しながら言う

なぜ簡単に命を諦めたのか、明久は悲しくてたまらなかった

「解った、俺も行くよ、だから」

明久は大剣で胴体を真つ二つにする

（馬鹿野郎どもが）

明久は少しでも異を見せた者を全て殺した

自分に従う数人の者達を連れ、明久達は闘いに向かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8343q/>

バカテス SS 「なんてこった、秀吉たんは男の娘おちんちんだったんだ」

2011年4月17日21時47分発行